児童文学作品を通して「ダウン症候群」を学ぶ（１）

～『ぼくのお姉さん』の内容分析～

仲　本　美　央

概　　要

現在、学校教育では地域社会の人々（さまざまな職業の人、高齢者、障害者など）との相互交流を目的とした学習が総合的な学習の時間などで展開されている。このような体験学習を通して、子どもたち一人ひとりが人間としての在り方や生き方を学んでいるのだが、現場の教員はその具体的な授業づくりに悩んでいるのが現状である。特に、福祉（障害）を対象とした内容は重要視されているにも関わらず、他の内容と比較して子ども一人ひとりの理解をはかることが困難であると言われている。具体的に、深く障害理解をはかるためには、児童一人ひとりの興味・関心の向けられたわかりやすい知識の情報提供、多様な学習展開が必要である。そして、その学習過程の中で道徳的な心情と行動が芽生えていくといえるだろう。

そこで、本研究ではダウン症候群（知的障害・発達障害）を題材とした『ぼくのお姉さん』を内容分析し、障害理解をはかる道徳教育の教材科に取り組むこととする。さらに、体験やさまざまな資料、授業技法を取り入れた学習プログラムを作成することで、各教科や特別活動・総合的な学習の時間との連携された授業づくりの提案をしていきたいと考える。

１．はじめに

現在、幼稚園、小・中・高等学校および大学に至るまで児童・生徒の望ましい社会性を育むため、地域社会との交流に取り組む積極的な学校が増加してきた。総合的な学習の時間の導入後は、実際に障害児・者や老人、地域の人々との交流の時間が作られ、相互理解をはかったり、その経験を通して「親切心」や「思いやり」を育てるといった授業が展開されている。しかし、他者との交流の経験を持ったからといって、すぐに相互理解をはかれるわけではない。特に、福祉分野の障害を対象とした教育は、他のテーマと比べ、取り組みが困難であるといわれ、障害に関する知識の習得や障害児・者の理解へと発展させる具体的な授業計画が求められている。

この問題を解決するためには、一人ひとりの児童が、基本的なねらいを定め、課題意識を持ち、自分自身の問題解決への意識を持つことが必要であり、そこに積極的な取り組みと意欲が生まれてくると考える。まず、道徳教育などにおいて課題意識を啓発するような授業が、体験授業を行う前の導入であろう。実践的に取り組むためには、障害を対象とした資料の発見や教材化が必要となってくる。『小学校指導要領解説』の「道徳編・第４章 道徳の時間の指導・第4節 学習児童の多様な展開」の中では、「資料を学習指導で効果的に生かすには、登場人物への共感性を中心とした展開とした、児童の資料に対する感動を大事にする展開にしたり、問題解決的な思考を重視した展開にしたりするなど、資料の特徴を生かした指導の手順や学習過程の工夫が求められる。」と指摘されている。

そこで、本研究ではダウン症候群（発達障害・知的障害）を題材とした『ぼくのお姉さん』を内容分析し、障害理解をはかる道徳教育の教材化に

取り組むこととする。さらに、体験授業やさまざまな資料や授業技法を取り入れた学習プログラムを作成することで、各教科や特別活動・総合的な学習の時間との連携された授業作りの提案をしていきたいと考える。

2．作品紹介

本研究の研究対象である 丘 修三作　かみや しん絵の『ぼくのお姉さん』は、1986年12月に偕成社より出版され、日本児童文学者協会新人賞・坪田譲治文学賞・新美南吉児童文学賞・赤い鳥さし絵賞等を受賞した作品である。養護学校教師として25年間の勤務経験のある丘 修三氏の生み出したこの作品の主人公「正一」のお姉さんは、「ダウン症候群」であり、障害者を題材とした内容は出版された当時から現在に至るまで、大きな感動を与え続けている。東京書籍出版である小学校の道徳の副読本には、作品の一部が掲載され、教材とて使用されている。さらに、1998年には東映株式会社より『ぼくのお姉さん』と原作とした映画が製作され、文部省特選教育映像祭優秀作品賞を受賞している。

3．作品内容

偕成社出版の『ぼくのお姉さん』は全23頁の4段落で構成されており、その詳細な内容展開は下記の通りである。

1）第1段落

登場人物……正一　(主人公)、ひろ（ダウン症のお姉さん)、お父さん、お母さん

内容展開……ある朝、ひろはお父さんと正一に「ああくてって。ああくね。(今日は早く帰ってくるように)」とお願いをするが、何故早く帰ってくるようにお願いをしているのか皆理解できない。その後、理解できないまま、皆仕事や学校に出かけてしまった。主人公である正一の立場から、お姉さんであるひろが4月から福祉作業所で働き、今は自分一人で仕事場まで通っていることや、冒険をするたちではなくて覚えたことはてこでも変更できない性格であることが述べられている。

2）第2段落

登場人物……正一、ひろ、お母さん、正一の友達A、正一の友達B、クラスメイトたち

内容展開……正一は、学校で自分の兄弟のことを書くという作文の宿題が出された。ダウン症のお姉さんを持つ正一は、過去のことを回想した。去年のお正月の出来事では、お金の使い方がわからないお姉さんが、お年玉の千円札を自動販売機でジュースが買える百円玉に取り換えて欲しいと言ってきたのでがっぽり儲かったと思っていたら、それがお母さんに見つかり、怒られてしまった。また、友達が家へ遊びに来た時の出来事では、お姉さんと友達と4人で一緒に遊んだのだが、次の日にはクラスメイトたちにお姉さんのことでからかわれた。そんな泣き出したいほどの経験からお姉さんの存在を疎ましく思う気持ちと普段の生活の中でお姉さんはいた方が良いという気持ちが交錯し、正一は『ぼくのお姉さん』と題した作文を書けないでいた。

3）第3段落

登場人物……正一、ひろ、お父さん、お母さん

内容展開……ひろが仕事から帰ってきた。夕食を作っていたお母さんの姿を見て、ひろは、怒って泣き出してしまった。何故そのような行動を取っているのか、お母さんにも正一にも最初は理解できなかったが、「今朝、皆でレストランに行くことを約束した」とお姉さんが主張していることに正一が気づいた。レストランへ行きたいという理由はわからないが、約束をしたことなのでお父さんの帰宅後、家族全員でレストランへ向かった。

4）第4段落

登場人物……正一、ひろ、お父さん、お母さん、レストランの店員、福祉作業所の障害者たち

内容展開……レストランに到着し、皆で料理を注文した。ひろはいつになく、きちんと座って皆のリードを取っていた。伝票が届いたときには、首にかけたポシェットから1通の給料袋を取り出してお母さんに差し出した。家族はその時初めて、ひろが初給料で家族にご馳走したくて、レストランに行くことを約束したことに気がついた。家族は皆喜びに満ちた。正一は、お姉さんの働いている福祉作業所に行った時のことを思い出し、一生懸命そこで働いたお金はどのくらいであるのか気にかかった。お父さんの持っていた給料袋を覗くと3千円しか入っておらず、1ヶ月1日中働いてこれだけの給料であることに愕然とした。食事が終わり、お父さんはひろに給料袋を渡し、支払いをしておいでと言った。正一は3千円ではお金が足りないとお父さんに慌てて声を掛けたが、お父さんはウインクを送ってよこした。すると、ひろが給料袋から店員に差し出していたのは3枚の1万円札であった。正一は家に帰るとすぐに机に向かって鉛筆を握り、『ぼくのお姉さんは障害者です。』と書き始めた。

4．内容分析

1）障害者と障害者を囲む人たちの気持ちの理解

『ぼくのお姉さん』の主人公は正一であり、ダウン症のお姉さんを持つ弟の心理描写がメインとして、ストーリーが展開されている。各段落における正一の心理描写は、下記のようである。

＜第1段落＞

(1) 福祉作業所に一人で通うお姉さん（ひろ）を心配いらないと思う気持ちが描写され、お姉さんを一人のしっかりした人間であると認めている。

(2) お姉さん（ひろ）の性格を「すごく慎重というか、おく病というか、まちがっても冒険をするたちではないし、それに、いちどおぼえたことは、てこでも変更できない性格なのだから。」と、とらえている。

＜第2段落＞

(1) お姉さんのお年玉の千円札を百円玉に換えてあげた詐欺行為が、お母さんにばれて叱られてしまったが、何故そこまで厳しく叱られるのかが理解できない。

(2) 「お姉ちゃんがいてよかったことってない。おバカさんなうえに、ブスでデブだ。……どこをとっても、お姉ちゃんにはじまんできるとこなんて、なんにもない。」と疎ましく思う。

(3) 友達が家に遊びに来た時、お姉さんを紹介することに勇気がいる。

(4) クラスメイトたちにお姉さんのことをからかわれ、泣き出したいほど悔しい。

(5) お姉さんはいない方が良いのかとも考えたが、一人っ子は嫌だし、面白く優しいお姉さんはいた方が良いと思った。しかし、疎ましいと思った経験と交錯し、『ぼくのお姉さん』と題した作文を書き出せないでいる。

＜第3段落＞

・全体的にひろの姿の描写され、正一のお姉さんに対する気持ちの描写は特になし。

＜第4段落＞

(1) 初給料で、ご馳走をしてくれるお姉さんを凄いと思う。

(2) 福祉作業所ではりきって働いているお姉さんの気持ちに共感する。

(3) お姉さんの給料の少なさに驚きを示す気持ちを喜びに満ちているお姉さんに悟られないように配慮している。

(4) 食事からの帰宅後、『ぼくのお姉さんは、障害者です。』と作文を書き始めた正一の姿には、初給料で食事をご馳走したお姉さんを誇りに思う気持ちが込められている。

以上が、各段落ごとの正一の心理描写された場面である。読み手である読者は、この正一のお姉

さん（ひろ）に対する気持ちを中心として、物語の中に入り込んでいく。この読者の感情移入は、弟の姉に対する葛藤・愛情を味わっていくと共に、ダウン症候群であるひろを理解していくことへも繋がっていく。この心での経験は、障害者に対する「心のバリアフリー」の第一歩ともなりうることであろう。さらには、障害者理解を深めることだけでなく、主人公である正一を通して障害者を囲む人たちの気持ちの理解も深まっていくことであろう。

2）ダウン症候群の特徴

この作品の主人公の正一の姉は「ダウン症候群」であり、知的障害及び発達障害者を題材としているのが大きな特徴といえる。「ダウン症候群」は、染色体異常による特有な生活行動・顔貌・身体症状及び知的障害・発達障害などの症状を伴う。それゆえに、一般的にあらわれる症状には大きな特徴があり、この『ぼくのお姉さん』にはその姿が表現されている。

表１は、『ぼくのお姉さん』に表現されたひろの姿を文章全体から抽出し、ダウン症候群の特徴を示したものである。この表では、ひろの姿（文章）を抽出し、その特徴を＜生活＞＜身体＞＜発達＞の三つの枠に分けた。この表からわかるように、丘 修三氏の描くひろの姿からは、ダウン症候群の特徴がわかりやすく、そして詳細に表現されている。子どもたちが「ダウン症候群」という障害を学び、理解するためには、具体的な内容であるといえる。しかし、この特徴の中の＜生活＞の枠にあげられた内容は、ダウン症候群の中でも一部の行動特徴であり、固定的なものとして子どもたちに情報提供してはならないと考える。健常者が十人十色であるようにダウン症候群の人たちもそれぞれが異なった行動特徴を持っている。また、知的障害のレベルもさまざまである。このことから、一つのダウン症候群の障害特徴として、障害理解をはかるとともに、「人間一人ひとりの理解と尊重」を学ぶための教材として発展させることも可能である。

さらに、この作品の中で描かれたひろは、「ダウン症候群」という障害の特徴だけでなく、家族のために初給料でご馳走をするという家族に愛情を向ける優しい人物として描かれている。知的障害は、一般的に身体障害よりも理解されにくく、偏見の目で見られがちである。しかし、この優しいひろの姿は、一般的な健常者と同じもしくはそれ以上に感情豊かで温かみのある人間であることを伝えている。これは、知的障害者の感情面に対する大きな偏見を取り除き、同じ感情を持つ人間同士であるという見方を生み出すことへも繋がっていくであろう。

3）家族愛

「ダウン症候群」という障害をもつひろを取り囲む家族がこの物語の中心的な登場人物であり、その登場人物のそれぞれの感情・姿が描き出されている。“ひろとの約束を守り、一つひとつのひろの感情や行動を汲み取って良い方向へと促すお父さん”“いつでもひろの言葉や行動や気持ちを気遣い、暖かなまなざしと心を向けるお母さん”“弟としてさまざまな心の葛藤で悩みながらも、優しく愉快なお姉さんを尊敬する正一”“家族に大きな感謝の気持ちと優しさを向けるひろ”この４人それぞれが家族の一員として、大きな役割を担っている。この４人の姿は、障害をもつひろが家族に存在するからというだけではなく、基本的な「家族愛」があるからこそ、一人ひとりが尊重しあい、助け合っている姿なのである。「障害」を理解することに加え、この「家族愛」を学んでいくことも、この児童文学作品の大きなメッセージとなりうるであろう。

個の社会といわれる現代社会は核家族化が進行し、さらには家族一人ひとりの行動すべてが個別化の傾向にあるといわれている。家族が何を考えているのかわからない、親子それぞれの行動に無

表1　ダウン症の特徴とひろの姿

	ダウン症の特徴	ひろの姿
＜生活＞	・陽気な ・愉快な ・おどけた ・満ち足りた ・おしゃべりな ・親しみ深い ・落ち着きがない ・やきもちを妬く ・かんしゃくを起こす ・同じ遊びをする ・負けず嫌い　　等…	①＜第1段落＞ 「…パジャマ姿のお姉ちゃんが、お母さんの腕にぶらさがるようにして、台所にきえるところだった。」
		②＜第1段落＞ 「まちがっても冒険をするたちではないし、それに、いちどおぼえたことは、てこでも変更ができない性格なのだから。」
		③＜第2段落＞ お姉ちゃんは片手を大きくあげ、ぼくにオス！　と愛きょうをふりまいてドアをしめた。」
		④＜第2段落＞ 「『バァー。』そうさけぶと、ひとりでお腹をかかえてわらいだした。」
		⑤＜第3段落＞ 「六時ちかく、陽気な声といっしょにお姉ちゃんが帰ってきた。」
		⑥＜第3段落＞ 「…お姉ちゃんが台所の床に、大の字になってわめいていた。」
		⑦＜第3段落＞ 「…こんなふうにこじれると強情なんだから、ひろは…」
		⑧＜第3段落＞ 「まったく。鉄の女だね、お姉ちゃんは。」
		⑨＜第4段落＞ 「いつものお姉ちゃんなら、そこにすわると、窓に顔をくっつけて、料理がくるまで、電車が行き来するのをみつづけるのだが、その日のお姉ちゃんはちがった。」
＜身体＞	・低身長 ・幅広く、扁平で、低い鼻 ・高口蓋、口唇皸裂 ・目尻が上がっていて、まぶたが厚い ・指短小　　等…	①＜第1段落＞ 「…自分と同じくらいの背たけの、ぼくの頭をなぜた。」
		②＜第1段落＞ 「…自分のぶあついくちびるに、みじかくぶさいくな指をあてていった。」
		③＜第2段落＞ 「…十七歳なのに、五年生のぼくととんとんの背たけだし、鼻はペチャンコだし、目もちっちゃくて、おせじにもパッチリなんていえやしない。おまけにくちびるはあついし…」
＜発達＞	・乳児期における発達が遅滞 ・知的障害を伴う　等…	①＜第2段落＞ 「…まんぞくにひらがなさえ読めないし、書くとなると、自分の名まえくらいがやっとだ。数の計算はまるでだめだから、お金のつかいかたなんかもわからない。」
		②＜第2段落＞ 「…ババが自分のところにくると、大よろこびするしまつだし、いまあけたカードさえもおぼえていられないので、ひとにとられてばかりいる。」
		③＜第4段落＞ 「お姉ちゃんは、しんぱいそうに顔をのぞきこんんだ。お母さんがなぜないているのか、わからなかったにちがいない。」
		④＜第4段落＞ 「…ありがとうといわれて、お姉ちゃんは小さな子どもがやるように、ぱちぱちと手をたたいた。」
		⑤＜全体＞ ・全文に掲載されたひろの言語表現

関心など基本的な家族の在り方が崩壊し、「家族愛」を築く体制さえも失われつつある。それゆえに、児童文学作品である『ぼくのお姉さん』を通して子どもたちが「家族愛」を感じ取り、学んでいくことが可能ではないかと考える。

4）障害者を取り巻く環境

家族を中心とした内容が展開されるほかに、障害者（ひろ）を取り巻く環境が描き出されている。それが、「障害者を見る子どもたちの目」と「福祉作業所」である。

「障害者を見る子どもたちの目」は、正一のクラスメイトが、ひろのことに関して正一にからかいの言葉を投げかけるという場面で描き出されている。前述した通り、一般的に知的障害者は身体障害者に比べ、障害が理解されにくい。特に、子どもたちにおいては生活経験が浅く、障害者や障害者を囲む人たちへの理解をはかることがさらに難しくなってくる。ここで描き出された「障害者を見る子どもの目」は、まさに一般的な障害を理解しえない子どもたちの視点を映し出したものである。また、このような子どもたちが障害に関する理解をはかるべき学びの場を与えなければならないという問題を提起している。さらには、この作品を読むということで、「障害」への理解を深めていかなければならないという意識をも生み出すことにもなりうるであろう。

「福祉作業所」は、ひろの通っている福祉作業所を正一が回想している場面で描き出されている。ここでは、福祉作業所の具体的な仕事内容や労働者（働いている障害者）の姿が描き出されていることによって、障害者が自立した一人の人間として社会の中で生活していることが理解できる。福祉作業所は、知的障害者授産施設などのような法的な基準には満たないが、障害者が働くことのできる場として、障害者や障害者の親、職員が地域の中で共同事業を行っている形式の作業所である。公的認可のない施設であるため、一般的な福祉施設に比べて公的援助が少なく、経営的には大きな困難を強いられているという問題点があげられる。現在、社会全体の中でも障害者の雇用状況は厳しく、その改善をはかっていかなくてはならないところである。この作品を通して知った「福祉作業所」という施設の情報は、今後の社会を担っていく子どもたちにとって、改善の意識を持つための最低限の知識であり、その後の問題意識への影響もありうるかもしれない。

しかし、「福祉作業所」に関する情報の中で、給与に関して大きな情報の誤りがあると考えられる。この作品の中で、ひろは「福祉作業所」の4月分の給与として3千円を給付された設定として描かれている。1997年の労働省の調査によれば、知的障害者の労働時間は月171時間が平均であり、1ヶ月に決まって支給される給与の平均額は11万2千円であると報告されている。全般の障害者の給与の平均額が25万円、一般の労働者の給与の平均額が27万1千円であるので、その給与の差異には大きな落差があるといえるが、ひろの給与の3千円はさらなる隔たりがあるといえる。労働法問題にも取り上げられるように、障害者の賃金は最低賃金法から除外されているために、その賃金額は一般労働者に比べてきわめて低い状態である。この大きな問題の改善を考えるためには、ひろの給与が低い設定は大変良い問題提起となりうるであろう。しかし、ひろの給与の3千円の設定は公的援助の少ない福祉作業所とはいえ、現実との隔たりがあまりにも大きすぎるため、問題提起となる以上に、誤った情報から差別意識へ繋がっていく恐れもある。差別という意識はなくとも、知的障害者の人は自分の最低基準もの生活費も稼ぐことができないと認識される可能性は免れないのではないだろうか。

5．道徳教材としての『ぼくのお姉さん』

1）知的障害を題材とした『ぼくのお姉さん』

『ぼくのお姉さん』は前述した通り、東京書籍

表２　道徳の副読本における題材の障害の種類とその掲載数

		１年生	２年生	３年生	４年生	５年生	６年生
1	東京書籍 （群馬県版）			○ △	○2	◎ ○2 □	○2
2	大阪書籍 『生きる力』		△ □	○ △	△	○5 △	○ △
3	学校図書 『かがやけみらい』			○	○ □2	○2 △ □	○ □
4	教育出版 『心つないで』	○					△
5	日本書籍 『のびゆくこころ』				○		□ △
6	光村図書出版 『きみがいちばんひかるとき』			○	○2 □	○ △ □	○ △ □

※　◎……知的障害・発達障害　　○……肢体不自由　　△……聴覚障害　　□……視覚障害

※　上記４つの記号の側に記入されている数字は、掲載回数である。

出版の群馬県版である小学５年生の道徳の副読本に作品の一部が掲載され、教材とて使用されている。障害を題材とした作品は、道徳教育の中でも重要な題材であり、さまざまな指導内容を目標に多く取り扱われている。

出版社６社各６学年の道徳の副読本全36冊に掲載されている障害を題材した作品を調査した結果が、表２と表３である。この２つの表からもわかるように、各出版社それぞれによって掲載数及びその題材内容は異なっている。ここに含まれた障害を題材とした内容は、具体的に障害そのものの理解をはかるためのものだけでなく、障害を間接的にでも理解はかることができるような題材も含まれている。ただし、老人及び内部疾患などの病気を対象とした題材は除外するものとした。この障害を題材とした作品全44作品のうち、肢体不自由に関する内容が25作品と最も多く、聴覚障害に関する内容８作品、視覚障害に関する内容７作品、聴覚障害・視覚障害が含まれた内容２作品、肢体不自由・視覚障害・聴覚障害が含まれた内容１作品、知的障害・発達障害に関する内容１作品の順となっている。このことからもわかるように、肢体不自由・視覚障害・聴覚障害などの内容がある程度の掲載数があるのに対し、知的障害に関する内容は唯一の作品となっている。上谷（1992）は、中学生の障害者に関する意識調査の中で、当時の中学生のほとんどのものが障害者に対する情報を得ているが、その情報は主としてテレビと家庭から得ていること、さらにその情報は肢体不自由に限られていることを指摘している。この調査から、約10年経った現在、マス・メディアからの情報が多種多様となり、障害児・者を対象とした内容も数多く報道されるようになってきた。しかし、教育現場である学校で使用する道徳の副読本の調査結果からは、今もなお、知的障害・発達障害よりも肢体不自由や視覚障害、聴覚障害に関する情報が多いという情報提供の偏りという問題点が明らかとなり、見直しの求められる点であるといえる。さらに、障害を対象とした児童文学作品の中でも、数少ない知的障害・発達障

表３　道徳の副読本に掲載された題材内容

	出版社	学年	題名・作者	指導内容	障害
1	東京書籍 （群馬県版）	3	まけるものか～野口英世 編集委員会編	不撓不屈	肢体不自由
2	〃	3	耳の聞こえないお母さんへ 児童作文	家族愛	聴覚障害
3	〃	4	新しい学校 編集委員会編	愛校心	肢体不自由
4	〃	4	やさしいなみだ 児童作文	思いやり 親切	肢体不自由
5	〃	5	「オトちゃんルール」は「あたりまえ」のルール 乙武洋匡作	思いやり 親切	肢体不自由
6	〃	5	ぼくのお姉さん 丘修三作	家族愛	知的障害 発達障害
7	〃	5	手さぐりの日々 日野多香子作	勇気・希望	視覚障害
8	〃	5	命いっぱい 大熊雅士作	生命の尊重	肢体不自由
9	〃	6	義足の聖火ランナー 編集委員会編	国際理解 親善	肢体不自由
10	〃	6	かたうでの名コーチ 木暮正夫作	勇気	肢体不自由
11	大阪書籍	2	さんぽ（歌） 中川李枝子作詞		聴覚障害（手話）
12	〃	2	リリー、ゴー！ 作者明記なし	安全	視覚障害
13	〃	3	勇気100％ 松井五郎作詞		聴覚障害（手話）
14	〃	3	あきらくんとぼく 作者明記なし	信頼・友情	肢体不自由
15	〃	4	ともだちになるために 新沢としひこ作		聴覚障害（手話）
16	〃	5	ＷＡになっておどろう 長万部太郎作詞		聴覚障害（手話）
17	〃	5	がんばれ宮本君 作者明記なし	信頼・友情	肢体不自由
18	〃	5	地雷と聖火 クリス＝ムーン著	国際理解 人類愛	肢体不自由
19	〃	5	車いすの少女 作者明記なし	思いやり 親切	肢体不自由
20	〃	5	わたしたちは池田先生をわすれない 小川陽子作	生命の尊重	肢体不自由
21	〃	5	これって不公平？ 作者明記なし	公正・公平 正義	肢体不自由
22	〃	6	翼をください 山上路夫作詞		聴覚障害（手話）

	出版社	学年	題名・作者	指導内容	障害
23	学校図書	6	友の肖像画 井美博子作	信頼・友情	肢体不自由
24	〃	3	歩けた、歩けた 編集委員会編	思いやり	肢体不自由
25	〃	4	町の人が作ったあいの手すり 小池タミ子作	思いやり	肢体不自由
26	〃	4	ラモン君 加藤てる緒作	勇気	視覚障害
27	〃	4	心を結ぶ一本のロープ 編集委員会編	思いやり	視覚障害
28	〃	5	友の肖像画 井美博子作	信頼・友情	肢体不自由
29	〃	5	バリアフリーって何だろう？		肢体不自由・視覚障害・聴覚障害
30	〃	6	見えない人に幸せを 神戸淳吉作	創意・進取	視覚障害
31	〃	6	車いすの弁護士 村田稔作	思いやり	肢体不自由
32	教育出版	1	さんぽ 作者明記なし	家族愛	肢体不自由
33	〃	6	ベートーベンの手紙 作者明記なし	不撓不屈 克己心	聴覚障害
34	日本書籍	4	タッチ 作者明記なし	信頼・友情	肢体不自由
35	〃	6	心に光を 村岡花子作	希望・勇気 不屈	視覚障害 聴覚障害
36	光村出版	3	みんなが気もちよく 編集委員会編	勤労	肢体不自由
37	〃	4	何かお手伝いできることは 編集委員会編	思いやり 親切	視覚障害
38	〃	4	おにぎりの味 乙武洋匡作	友情・信頼	肢体不自由
39	〃	4	文字を書くよろこび 編集委員会編	勤勉・努力	肢体不自由
40	〃	5	だれか助けて 編集委員会編	思いやり	肢体不自由 親切
41	〃	5	ヘレンとともに－アニー＝サリバン－ 井美博子作	不撓不屈	視覚障害 聴覚障害
42	〃	6	ぼくの名前よんで 丸山浩路作	家族愛	聴覚障害
43	〃	6	パラリンピックの歴史 編集委員会編		肢体不自由
44	〃	6	長い長い道 竹内恒之作	思いやり 親切	視覚障害

害を題材とした『ぼくのお姉さん』を取り上げ、子どもたちへ障害に関する幅広い知識の提供と障害理解のはかり方を考えていかなければならないであろう。

2）学習プログラム

小学校における道徳教育の現状は、副読本・道徳関連の読物資料・視聴覚教材などの資料の使用や、体験学習・エンカウンターグループ・ロールプレー・グループワークなどの技法が組み込まれ、全体35時間という授業の中でその指導形態が多様化している。しかし、多様化しているからといって、すべての資料や技法を取り入れることが良いというわけではなく、１つのねらいを明確化し、その資料や技法の組み合わせを行い、子どもたちの心情や行動の発展に合わせた指導内容を進めなければならない。

道徳の副読本に掲載されている『ぼくのお姉さん』を障害を学ぶ教材内容として小学校５年生の年間指導計画に組み込み、学習プログラムを立てるには、「１つのねらいを明確化し、活用する資料や技法の組み合わせを行い、子どもたちの心情や行動の発展に合わせた指導内容の進め方」に加え、「道徳の授業時間以外の各教科、特別活動および総合的な学習の時間との連携をはかった指導内容」を取り入れることで、より総合的な授業を展開していくことが可能であると考える。

図１は、『ぼくのお姉さん』の学習プログラムである。この学習プログラムは、『道徳心の教育』第10章で竹田（2001）の述べる道徳教育の全体計画や道徳の時間の年間指導計画にあたっての留意点である表４の５つを基礎として、ａ～ｉの基本的な教師の指導と児童の活動の流れを提案したものである。

ａ～ｉまでの各枠の内容は、各活動場面における教師の指導・児童の学習活動の例である。この活動は、一人ひとりもしくは全体的な児童の実態や授業の流れによって選択されるものであり、その活動の組み合わせは多種多様である。実際に道徳の授業計画を行う際、クラス全体の現状に促したプログラムを作成するには、より具体的な児童の心の動きをとらえる必要性があるため、教育活動の事前、事中、事後に「児童の障害に対する意識調査Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」の教師の活動を取り入れる。各意識調査の意義は、次の通りである。

「児童の障害に対する意識調査Ⅰ」

Ⅲ 内容分析で述べられているとおり、『ぼくのお姉さん』の中には、「障害者と障害者を囲む人たちの気持ちの理解」「ダウン症候群の特徴」「家族愛」「障害者を取り巻く環境」と障害の課題を幅広く学ぶことができる。この作品を年間計画に取り入れるため、図１の①に含まれる児童の障害に対する意識調査Ⅰにて、児童の実態調査を行い、児童全体の現状では、『ぼくのお姉さん』を通して障害を学ぶの中でもどの課題に着目し、何をねらいとして授業を進めていくかを明確化する。その明確化したねらいに沿って、教師自身が『ぼくのお姉さん』の教材化・地域社会におけるの福祉施設の実態調査・各教科や学内活動との関連性の把握に取り組むことが可能となる。

「児童の障害に対する意識調査Ⅱ」

総合的な学習の時間において、どのような教育活動が必要とされているかが明確となる。

「児童の障害に対する意識調査Ⅲ」

授業の終了後、その後の他教科や活動、次学年への関連づけた指導内容の計画に示唆が与えられる。

意識調査を行うことは、①の児童・生徒の実態を的確に捉えるだけでなく、その他の②～⑤までの留意点を踏まえた上での道徳教育の全体計画や道徳の時間の年間指導計画への発展の補足的役割ともなる。この調査を基本とした学習プログラム

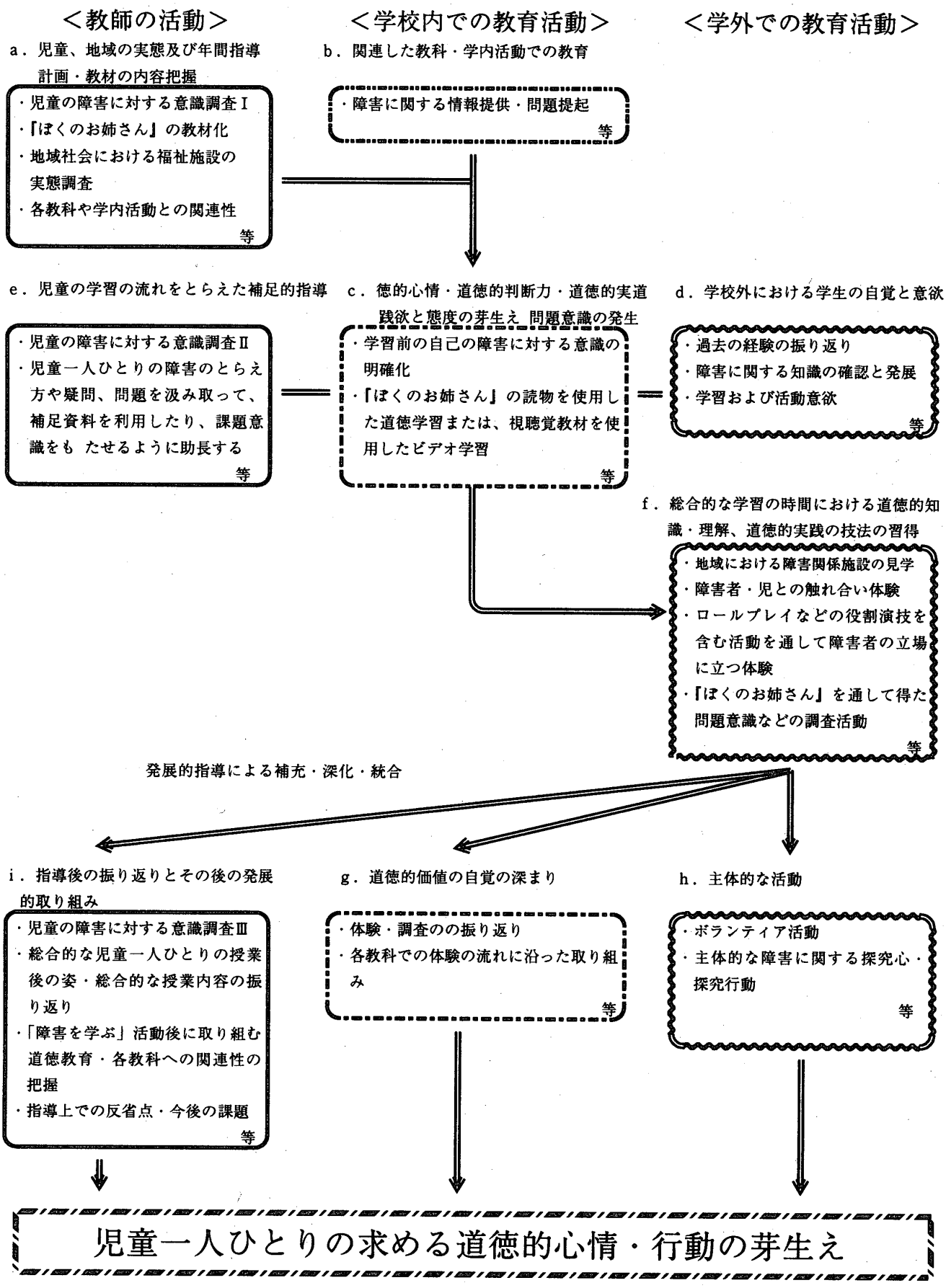

図1 『ぼくのお姉さん』を教材とした学習プログラム

表４　『道徳心の教育』第10章で竹田（2001）の述べる道徳教育の全体計画や道徳の時間の年間指導計画にあったての留意点

①児童・生徒・および地域の実態を考慮する
②学校の道徳教育の重点目標を設定する
③道徳の内容と各教科、特別活動および総合的な学習の時間における指導との関連を示す
④家庭や地域社会との連帯方法を示す
⑤小学校では低・中・高学年の各２学年間、中学校では3学年間を見通した重点的な指導や内容項目間の関連を蜜にした指導を行うよう工夫する

作成によって、クラス全体の実態を把握した道徳教育というだけでなく、児童一人ひとりの「課題意識の発生→知識の理解と習得→実践の技法の習得→道徳的価値の自覚→主体的活動→道徳的心情・行動の芽生え」を生み出す道徳教育へと発展できると考える。

子ども自ら課題を見つけ、問題解決を進めていく能力と、学び方やものの考え方を身につけて、主体的、創造的に問題解決や探求に取り組み、「生きる力」を形成していくことが「総合的学習の時間」の目標とされている。上記にあげたの学習プログラムは、『ぼくのお姉さん』の内容分析を行ったことで、１つの読物に多くの課題意識を見つけ、教材化することが可能となった。それゆえに、「子ども自ら課題を見つける」総合的学習の時間と関連づけた教育活動へと繋がったのである。これからの道徳教育においては、児童一人ひとりの実態を把握するとともに、読物やビデオなどの教材をより深く内容分析を行うことで、個に応じた指導内容の確立をはかっていくことが求められるであろう。

６．おわりに

本研究においては、『ぼくのお姉さん』の内容分析を行い、道徳の時間の教材として学習プログラムの作成を試みた。「福祉」の内容を道徳の教材として取り上げることは他のテーマに比べ、体験学習やその他の活動が伴わなければ理解を深めることが難しいことから、児童の実態に沿ったねらいを定めて授業の流れを作り出していくことが困難であるといわれる。しかし、今回『ぼくのお姉さん』を副読本の指導内容である「家族愛」という画一的な視点でとらえるのではなく、内容分析を行ったことでさまざまなねらいを導き出すことが可能となり、このことによって、学習プログラムの多様化がはかられたと考える。

今後の研究においては、実際にこの学習プログラムを取り入れた授業を多角的な視点から研究していきたいと考える。さらに、道徳教材の内容分析の重要性を導き出すため、『ぼくのお姉さん』の主人公正一の気持ちを、実際にダウン症候群の兄弟を持つ人物が経験した気持ちと照らし合わせて、内容を質的に研究することへも取り組んでいきたいと考える。

Ⅶ　引用・参考文献

１）稲垣忠彦著　『総合学習を創る』　岩波書店　2000.

２）今道友信　小川 信夫他16名著　『道徳 きみがいちばんひかるとき１～6』光村図書　2000.

３）上谷宣正　『中学生における障害者意識の分析―交流群と非交流群のテレビ視聴感想分析を通して―』　北海道教育大学紀要（第1部Ｃ）、43（1）、pp193-208　1992.

４）岡田明著　『福祉心理学入門』　学芸図書株式会社　1995.

５）丘修三著　かみやしん絵　『ぼくのお姉さん』

偕成社　1986.
6）小寺正一　藤永 芳純ほか4名編著　『小学道徳 生きる力1～6』　大阪書籍　2000.
7）児玉勇二編　『障害をもつ子どもたち』　明石書店　1999.
8）厚生統計協会編　『国民福祉の動向・厚生の指標臨時増刊・第47巻第12号・通巻739号』　厚生統計協会　2000.
9）小学校道徳編集委員会編　『小学道徳 のびゆくこころ1～6』　日本書籍　2000.
10）高橋静子　「障害を持つ人の理解を深め、共に生きる体験」　『道徳教育 2月号』　pp72-75　明治図書　1999.
11）辰野千尋他23名著　『小学校道徳 かがやけみらい1～6』　学校図書　2000.
12）道徳教育編集部　『道徳教育 10月号　特集「福祉」の道徳授業にチャレンジしよう』　明治図書　2000.
13）道徳教育編集部　『道徳教育 2月号臨時増刊　特集　道徳授業が見えてくる－実施状況の調査の分析解明と今後の展望－』　明治図書　2001.
14）「道徳」群馬県版編集委員会　『道徳1～6　群馬県版』　東京書籍　2000.
15）仲村優一・一番ヶ瀬 康子編集委員会代表　『世界の社会福祉　日本』　旬報社　2000.
16）日本知的障害福祉連盟編　『発達障害白書－2001年版－』　日本文化科学社　2000.
17）松島恭子編　『ダウン症乳児の親子心理療法』　ミネルヴァ書房　1997.
18）村井実著者代表　『小学道徳 こころつないで1～6』　教育出版　2000.
19）ミネルヴァ書房編集部編　『社会福祉小六法』　ミネルヴァ書房　2000.
20）山崎英則・西村 正登編著　『道徳と心の教育』　ミネルヴァ書房　2001.

(2001年9月21日　受理)

Learning about Down's Syndrome Through the Book
—— A content analysis of Boku no Onesan ——

Mio Nakamoto

Abstract

The purposes of this study was to measure the impact of the book Boku no Onesan at a tool for learning about Down's Syndrome*.

The book is about a boy(Shouichi) who has a sister(Hiro) who has Down's. Shouichi struggles inwardly with how to treat his Down's afflicted sisterand as a result responds to her colly. Along the way though the sister's constant affection changes his mind. Readers of the book are usually affected deeply and can also learn about Down's. The story-line includes imformation about Down's Syndrome in children.

In this present day and age, it is important for school children to understand all sorts of people(kinds of jobs,people with special needs,the elderly and so on) in their local community. Accordingly children need to learn about the content of social welfare through moral education at school. However, it is difficurt to present these ideas to chirdren at their level. It is also stressful for teachers who have to plan these lessons.

This study clearly suggests the importance of moral education for school children on how to properly understand Down's Syndrome. Firstly, a content analysis of the book Boku no Onesan is needed and then secondly how to plan Down's related lessons regarding the book. Lastly, programming the lesson in relationship to other couses of study.

*Down's Syndrome-a condition where the patient has mental retardation or is developmentally delayed.